

〔博士論文概要〕

高等学校体育における主体的問題解決能力育成プロセスの因果構造と達成度評価

令和3年度

横尾 智治

目的

本研究の目的は、高等学校体育における主体的問題解決能力育成プロセスについて、因果構造、1年間の変化、達成度評価テストを明らかにすることであった。そのために、以下の研究課題について検討した。

研究課題1

高等学校体育における主体的問題解決能力育成プロセスの因果構造
構造方程式モデリング (SEM) を適用して、高等学校体育における主体的問題解決能力の育成プロセスの測定項目の尺度特性と因果構造を明らかにすることであった。

研究課題2

高等学校体育における主体的問題解決能力の1年間の変化
質問紙テストを用いて、高等学校体育における主体的問題解決能力育成プロセスを構成する領域の1年間の変化を明らかにすることであった。

研究課題3

高等学校体育における主体的問題解決能力の育成のための達成度評価テストの項目特性とテスト特性
項目反応理論分析を適用して、高等学校体育における主体的問題解決能力育成プロセスを構成する領域の達成度評価テストを明らかにすることであった。

方法

研究課題 1

目的：高校体育における主体的問題解決能力の育成プロセスの測定項目と因果構造を明らかにすることであった。そのために、質問紙調査を実施し、構造方程式モデリング (SEM) を適用して、仮説構造モデルを分析した。

対象者：2010 年度の高校男子 1 年生から 3 年生：410 名

2011 年度の高校男子 1 年生：95 名

2012 年度の高校男子 1 年生：146 名

3 年度の合計：651 名

研究課題 2

目的：高校体育における主体的問題解決能力育成プロセスにおける 1 年間の変化について明らかにすることであった。そのために、質問紙調査を実施し、一元配置分散分析を適用して、2 年度における年間の変化を分析した。

対象者：2010 年度の高校男子 2 年生：139 名

2011 年度の高校男子 3 年生：144 名

2 年度の合計：283 名

研究課題 3

目的：高校体育における主体的問題解決能力の育成プロセスを構成する領域の達成度評価テストの項目特性とテスト特性を明らかにすることであった。

そのために、達成度評価のテスト理論である 2PLM の項目反応理論分析を適用して、

主体的問題解決能力の育成プロセスを構成する領域の測定項目について、

項目の一次元性と適合性、推定値の不変性、およびテストの信頼性、妥当性、適合性を分析した。

対象者：2010 年度の高校男子 1 年生から 3 年生：410 名

2011 年度の高校男子 1 年生：95 名

2012 年度の高校男子 1 年生：146 名

3 年度の合計：651 名

結論

本研究の目的は、高等学校体育における主体的問題解決能力育成プロセスについて、因果構造、1 年間の変化、達成度評価テストを明らかにすることであった。そのために、研究課題 1 から 3 について検討し、以下に示す結論が得られた。

研究課題 1

高等学校体育における生きる力の育成の基本的要因である主体的問題解決能力育成プロセスを構成する測定項目と領域間の因果構造が明らかとなった。

研究課題 2

高等学校体育における主体的問題解決能力育成プロセスを構成する領域の1年間の変化が明らかとなった。

研究課題 3

達成度評価のテスト理論である項目反応理論(IRT)分析を適用して、高等学校体育における主体的問題解決能力育成プロセスを構成する領域の達成度評価テストの項目特性とテスト特性が明らかとなった。

以上の通り、研究課題1では古典的テスト理論(CCT)・相対評価ではあるが、高等学校体育における主体的問題解決能力育成プロセスの測定項目と領域間の因果構造が明らかにされた。

次に研究課題2で年間の体育授業を通して、主体的問題解決能力が発達することが確認された。

研究課題3では、対象者集団に左右されない項目反応理論(IRT)の達成度評価基準を開発した。これにより生徒の学習改善と教員の指導改善に役立てることができる。この点は新規性があり、主体的問題解決能力の育成プロセスに対して発展させる手掛かりになると考えられる。